

ドル/円相場のトレード戦略

【ドル/円 週足】



■中期展望

昨年 2018 年のドル/円相場は、当初想定していたように 2017 年と同様のレンジ相場が継続しました。

年間の値幅は 10 円を下回り過去最少、2017～2018 年の 2 年間を通して値幅は 14 円に満たず過去最少となり、市場のボラティリティから収益を得ようとするディーラーにとっては極めて厳しい環境となりました。

その大きな要因としては、絶好調だった米国の経済状況にもかかわらず、年初に米国の政策への不透明感からドルが下落したこと、そして年末には米金利のフラットカーブ化やそれに伴う米国株式の大幅下落、米中貿易摩擦の激化などのリスク要因が相次いだことでドルの上値が抑えられたことが挙げられるでしょう。

米国経済が強調であり利上げ予測が続くためにドルロング・ポジションが蓄積される中でもドルが大きく上昇しないという現象は、ドル高派にとって想定しにくい状況であったと思われます。

そのため、本年年明けの 1 月 3 日に 108 円を割り込むと損切りのドル売りを巻き込みながら、ドル短期に 4 円以上の下落という動きが引き起こされました。

その後、1 月の米 FOMC では声明文から追加利上げのバイアスが削除され利上げ継続という政策スタンスが大きく変わったことにより米国株式およびドルは持ち直しました。

また、米経済指標は好調を維持するものも多く、良好なファンダメンタルズのなか金利が低位安定

ドル/円相場のトレード戦略

するという適温相場が再び始まったとの期待が強まりました。

さらに6月のFOMCで米国が利下げ方向へ政策変更したことが明確となり、実際に7月のFOMCでは10年ぶりの利下げが実施され、追加緩和への期待も大きいことからドル安が進みました。

また、米国が9月から対中追加関税の実施を発表したことで、米中貿易摩擦値の警戒感が高まり、ドルは105円台まで下落しました。

ただし、米国の追加利下げ観測が強まるものの、米国景気はまだ成長を維持しており、ドルが一方向的に売り込まれる経済状況にありません。

目先は、104円～105円水準を底値と意識しての戻り売りがメインシナリオとなるものと思われ、104円～108円レンジを想定します。

■短期展望

先週は、106円前半でスタートし、下値不安が意識される軟調な動きで、3日に発表された米ISM製造業景気指数が49.1と3年ぶりに好不況の分水嶺「50」を割り込んで米経済の先行き不透明感が高まると105円74銭の安値を付けました。

しかし、その後に米中両国が閣僚級の通商協議を10月初旬に開催することで合意したとの報道を受け、リスクオンの流れとなり107円23銭まで上昇し、107円近辺での週越えとなりました。

短期的には105円水準が強い下値抵抗となっておりドルの急落は考えにくいように思われます。しかし、米中貿易摩擦や米経済減速懸念、米FRBの大幅利下げ観測など大きな流れはドル安方向にあり、ドルの上値追いも難しい状況といえます。

したがって、今週も106円を中心とした方向感のつかみにくい相場が予想されるため、105円～107円50銭程度のレンジを想定します。